

や やるぞ～ ま まけないぞ～ が がんばろうぜ～ た 楽しい学校になるように

みんな悩んで大きくなった！

私が教師になりたての頃、同僚の先輩教師が誇らしげに語っていた、その先生の恩師であるY教師の逸話がある。

Y先生のある道德の時間でのこと。キセル（列車等へ無賃・不正乗車）の話が話題になった。「実は先生も高校生の頃、一度だけ切符を買わないで改札口を通り抜けたことがあってなあ。」と軽い気持ちで過去の事実を暴露すると、「なーんだ、先生だって悪いことやってたんだ。」と数人の生徒から非難の声が上がった。ここからがその先生のすごいところ。すぐさま授業中にクラスの生徒全員を近くの駅まで引き連れ、駅員室に乗り込み、子どもたちの前で駅の職員全員に十年以上の前のことを深々と謝罪してみせて、さっと一万円を差し出した。というのだ。

Y先生を崇拜し、自分をも「歩く道德教師」とうそぶく彼の姿に、日頃のギャブル三昧の素行を知っている我々同僚教師は、必死に笑いをこらえざるを得なかったが、話半分に聞いていた。

実話だというのだから、さぞや相手の駅員の皆さんも大いに面食らったことだろうが、子どもたちにはかなりのインパクトだったには違いない。

私も他人のことをあれこれ言えるような、決して道德的ではない人間だが、正直、道德の指導は難しい。きれいごとばかり並べて、価値の押し付けのような時間になってしまうことが往々にしてある。でも、裏を返せば、教師の力量次第で生徒の興味・関心を大いに喚起できる授業ができる醍醐味もある。やり方を工夫すれば授業する側もおもしろいし、普通の教科指導ではわからない生徒の内面や本性に迫ることもできる。場合によっては、教師自身の人生経験が問われることもあるだろう。

さて、様々な教育者・心理学者が人間の道德性や道德教育等に諸説を唱えているが、人間の道德性に発達段階があるということに異論を挟むものはいない。つまり、道德性の発達というのは、外的な統制から内面的な自律的な統制へと、一般的な知的発達と何ら変わるものなく発達する、あるいは発達すべきものだという考えだ。

わかりやすく例を上げて説明しよう。子供同士が遊んでいる。今自分が使っているおもちゃを友達に「貸して！」と言われた。その子の対応として

- ① 貸さないと、お母さんににらまれて叱られるので、不本意だけど貸してやる。それは親切心や仲良くしたいからではない。親に叱られないように振る舞い、罰や苦痛を回避するためだ。
- ② おもちゃを独り占めしたいところではあるが、今貸しておく、今度は

僕の好きなおもちゃを貸してもらえるかもしれない。いずれそれ相当の見返りが期待できる。

- ③ 自分がおもちゃを貸してあげれば、友だちや周りの大人を喜ばせることができるし、自分も認められる。決して、Give and Take の打算的な欲ではなく、みんなに頼りにされ期待されるから貸してあげる。

道徳性の発達段階から言えば、①⇒②⇒③の順に道徳性が高いと言える。端的に表現すると、①は「罰回避・従順志向」、②は「道具的互惠主義」、③は「良い子志向」ということになる。

中学校では、令和2年度から、道徳の時間は「特別な教科 道徳」として、位置づけられ、係る学習指導要領の一部改正等がなされた。

子どもたちに道徳的価値を理解させ、自己を見つめさせるという基本的な指導は変わらないが、道徳的価値の大切さ、本質、意義等を多角的・多面的に考えさせ、議論する道徳への転換が求められている。また、生活と乖離しないような、「解決策」まで道徳の時間に考えさせる「問題解決型」の授業実践が重要とされている。

これはとりもなおさず、昨今の、いじめをはじめとする問題行動等の深刻化・複雑化・多様化が背景にあるのは言うまでもない。

私も若かりし頃、モラルジレンマ、いわゆる葛藤資料を自作して、研究授業を実践したことがある。

教務室の清掃担当だった二人が、教務室で集めたゴミを集積所に持っていったときに、ある教科の定期テストの原案のプリントをゴミの中から見つけてしまう。天使と悪魔のささやきの二人のやりとりがメインの内容だ。

生徒には二人でペアになってもらい、役割演技をさせながら授業を展開した。立場を代えながら「自分だったらどうするか」「自分で何ができるか」を考えさせ、解決への見通しをもたせることを意識した指導がポイントだった。

実はこの自作資料、私の中学校時代の実話がベースになっている。私と仲良しだった友達二人で、友人は「ばれないから二人だけの秘密にして、持って帰ろうよ。」と言い、私も、心の中では一瞬ラッキーと思いつつも、「やばいよ。先生に正直に言って渡そうよ。」と主張し、結局後者を選択した。先生には「あ、いいよいいよ、それ本番で使わないから。」と軽く流された。

因みに、道徳の分野で最も著名なハーバード大学教授であったローレンス・コールバーグ(1927～1987)は、道徳性発達段階の最高レベルは、『正義』と『慈愛』の原理が相互に指示し合い調和するレベルであり、この段階を代表する人物として、キリスト、ソクラテス、仏陀、孔子、リンカーン、キング牧師などを挙げている。

かつてサントリーのテレビCMで、タレントで直木賞作家の野坂昭如氏も「ソ、ソ、ソクラテスかサルトルか、ニ、ニ、ニーチェかプラトンか、みんな悩んで大きくなった。大きいわ、大物よ・・・」と歌っていた。そうだ、どんな偉人だってみんな悩みながら成長してきた。悩んでいるのは君だけじゃない。